

「ビワ、あるいは記憶」

—2 稿—

2026/1/8
雨森 れに

人物表

立石 嘉一
けいじ かいち

(77) 腎臓を患っている老人
嘉一の弟。認知症

職員A
職員B

1. 介護老人福祉施設・外観（昼）

大きめの介護施設。道路に沿った広い庭があり、様々な植木が植えている。その中に実をつけたビワの木がある。

2. 介護老人福祉施設・受付（昼）

マスクをした立石嘉一（77）が面会受付票を記入している。

受付職員が票を受け取り、
受付

「立石佳二さんのお兄様ですね。どうぞ」

面会証を渡す。

嘉一、面会証を首にかけ、館内を進む。

3. 介護老人福祉施設・廊下（昼）

館内はユニット型個室のつくりになっている。

嘉一、館内の様子を見ながら歩いている。

ビービーという機械音。

部屋の前にいるランプが光る。

職員A、その部屋に駆け込む。

室内から激しい咳。

職員Aの声 「食べ物はダメだつて言つたじゃないですか！」

嘉一、開け放たれたままの引き戸から室内を覗く。

中年女性が職員Aに頭を下げている。

女性 「（ごめんなさい。これ、好きだつたから……）」

女性の手には菓子の包み紙。

嘉一、また歩き出す。

何かを考えるように頭を搔きながら。

4. 介護老人福祉施設・佳二の部屋（昼）

小さい個室。窓側にベッドがある。

横になつて立石佳二（74）、外を見てぼーっとした様子。

嘉一 「よう。元気か」

嘉一がベッドと窓の間にパイプ椅子を広げる。

佳二の視線がゆっくりと嘉一を捕える。

嘉一、座つて佳二を眺める。

佳二、不思議そうな様子で、

「どなたでしたつけ」

嘉一、マスクをズラす。

嘉一、「バカ。俺だよ」

佳一、少し考えて、

「兄ちゃん、久々だなあ」

佳二、満面の笑みで手を差し出す。

嘉一、佳二の手を両手で包む。

「俺も先月まで入院しててさあ。来れなくてごめんよ」

佳一、「ああ？ どこが悪いん」

「腎臓がよ。もうすぐ透析だつて。歳は取りたくないよ」

「お互いよぼよぼだよなあ。昔は——」

佳二、それまで合つっていた視線が外れる。

再度嘉一を見て、

「あの。どなたでしたつけ」

手を引つ込めようとする。

しかし嘉一は手を離さない。

嘉一、「バカ。俺だよ。嘉一」

佳二、理解できないという様子。

「お前の兄貴。わかるか？」

嘉一、「兄とはずいぶん会つてなくて」

嘉一、「俺が、お前の兄貴だつて言つてんだよ」

佳二、首を振る。

嘉一、悔しそうに手を離す。

ゆっくりと息を吐き、椅子に体を預ける。

窓に目を向け、外を見る。

午後の光を浴びるビワの木があり、実がなつている。

佳二も窓を見る。

消え入るような声で、

佳一、「ビワ、なつかしいねえ。私はアレが好きなんですよ」

嘉一、佳二を見る。

介護老人福祉施設・ステーション（昼）

ステーションの中では職員らが書類仕事をしている。

嘉一、職員Bと話をしている。

嘉一 「果物なんすけど」

職員B、言いにくそうに、

職員B 「佳一さん、ミキサー食ですよね。固形物は無理ですね」

嘉一、頭を搔く。

嘉一 「それなら。家で剥いて、果汁を絞つたらいいけますか」

職員B 「いえ、ご家庭で調理されたものは禁止でして」

嘉一 「じゃあ、ここに調理場にお願いしたらいいんですね？」

職員B 「ごめんなさい。それも難しくて……」

嘉一が苛立つて眉根を寄せせる。

嘉一 「なあ。弟にビワ食わすだけじゃねえか。ちょっとぐらい融通をさせてくれてもいいんじゃないの？」

嘉一、足音荒く、その場を去る。

介護老人福祉施設・佳一の部屋（昼）

嘉一、椅子にどかりと座る。

嘉一 「ビワぐらいいいじゃねえか。なあ？」

佳二 「ああ、兄がよく庭で」

嘉一 「だから！ 僕がお前の兄貴だつて言つてんだろう！」

佳二、目を見張る。

嘉一 「悪かった。お兄さんが庭で、なんだつて？」

佳二からゆつくり緊張がとけていく。

視線が泳ぎ、嘉一の後ろで止まる。

佳一 「兄は木に登るのが得意でねえ。私がもたもたしてると、ビワ取つて投げてくれてね。それが嬉しくてねえ」

嘉一、目をぎゅっと閉じる。

佳二が目を細める。

佳一 「兄ちゃん？」

嘉一が目をあける。

佳一、しっかりとした眼差し。

嘉一、頭を搔く。

佳一 「また考え事してるん」

嘉一 「どうやつたらお前がビワ食えるかなつてさ」
「兄ちゃんがくれるのはすっぽいからなあ。あの時も……」
佳二 「しわしわになつたもんだね」

佳二、言葉が出てこない。

それ以上続けるのを諦め、自身の右手を眺める。

佳二 「しゃわになつたもんだね」

嘉一、佳二の手の横に自分の手を並べる。

佳一 「俺だつておんなんじだよ」

佳一、嘉一の手を包む。

嘉一 「俺だつておんなんじだよ」

佳一、嘉一の手を包む。

嘉一 「なあ。腎臓、ひとつあげようか」

嘉一 「お前、覚えてんのか」

嘉一 「いいよ。いらねえよ」

嘉一、困つたように笑う。

嘉一 「ビワ、見に行つてみるか?」

嘉一 「兄ちゃん、登つちゃダメだよ」

嘉一 「兄ちゃん、登つちゃダメだよ」

嘉一も笑顔になる。

7. 介護老人福祉施設・庭 (昼)

7.

嘉一、佳二の車椅子を押している。
初夏の日差しに目を細める。

嘉一 「あちいな。おい、大丈夫か」
佳二 「ちようどいいよ」

嘉一 「そうか」

嘉一、足を止め、腎臓あたりを押さえる。
痛みに顔がゆがむ。

佳二 「兄ちゃん、どうした」

佳二、振り返る。

嘉一 「脇腹がつりそうになつたんだよ」

佳二 「昔からそうだよね。足とか脇腹とか」

嘉一 「うつせえ。今日はよく喋るなあ」

嘉一、笑いながら額の脂汗を拭う。

嘉一 「動くぞ」

車椅子を押す。

ふたりはビワの木を目指して進む。

「子供の頃は足が速かったのになあ。このぐらいの距離なんて一瞬だった」

「お前は逃げ足が速かつたんだろ」

「さすがよく見てるなあ」

「木も登れなくてさ。しょーがねえから代わりにビワ取つてやつた」

佳二がくすくすと笑う。

ビワの木陰に到着し、車椅子が止まる。

嘉一「ウチにあつたのもこのぐらいのだつたな」

佳二「俺、登れなかつたんじやなくて、待つてたんだよ。兄ち

やんが気にしてくれるのが嬉しくてさ」

嘉一「だから教えても登れなかつたのか！　お前、このやうう」

嘉一、佳二の顔を覗き込み、ハツとする。

佳二、ぼーっとした表情。

嘉一「おい」

佳二、何か言おうとする。

が、嘉一が制止する。

嘉一「まだいいよ」

嘉一、ビワの木を見上げる。

佳二、その様子を見て、同じく見上げる。

ビワの木が穏やかな風に揺れる。

道路から子供たちの笑い声。

嘉一、ゆっくりと目を閉じる。

おわり